



「山口大学創基の地」記念碑 平成26年3月25日建立

山口は、今もって文教都市として語られる町で、山口講堂の造設を契機に修学の道が開かれ、文教都市・山口の基盤ができあがったと言えます。

山口大学は、2015年に創基200周年を迎えます。その淵源とも言える「創基の地」への記念碑の建立は、母校の長い歴史を語り継ぎ、後世につなぎ伝えていくことの大切さを認識させられる良い契機となります。

記念碑が建立された場所を多くの方に訪れていただき、文教都市・山口の歴史を知っていただくことが期待されます。



第34号 発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院人文科学研究科・旧文理学部文学科 同窓会

(事務所) 〒753-0831 山口市平井773-2 沖田ビル202 電話・FAX 083-928-4527 郵便振替口座 01500-4-15902 http://homepage3.nifty.com/kobun/ メール: kobun1981@ybb.ne.jp

山口大学の改革と 創基二〇〇周年



山口大学長 岡 正朗

鴻文会の皆様には、常日頃より山口大学に對しまして、多大なるご支援を賜っており、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

自己紹介をさせていただきます。私は昭和四五年に山口大学医学部に入學し、昭和五一年三月に卒業、消化器外科医を目指して山口大学外科学第二講座に入局いたしました。平成八年からは同教授に就任し、平成二二年〜平成二五年三月まで医学部附属病院院長を務め、本年の四月より山口大学長を拝命いたしました。専門領域は消化器外科と腫瘍外科です。生まれも育ちも山口県、山口県立防府高等学校から山口大学です。母校愛は誰にも負けないつもりであります。また、家内も山口大学文理学部文学科英語学・英米文学専攻卒ですので、鴻文会の会員であり、昨年、卒業以来の同窓会を湯田で開催し、当時が懐かしく思い出されたと喜んでおりました。

今、大学は大学紛争以来の激動期と言えます。すなわち、文部科学省はこの二年間(平成二六、二七年)を「改革の加速期間」として改革状況の評価を行い、大学への支援、いわゆる運営費交付金に大きな差をつけることを求めています。各学部はミッションの再提出を求められ存在そのものが問われています。改革のキーワードは、グローバル化、イノベーション、地域貢献であり、人事の弾力化(年俸制の導入)とガバナンス強化(学校教育法及び国立大学法人法の改正による学長のガバナンス強化)は大学改革が迅速に行えるための施策と言えます。すなわち、政府、文部科学省は本気です。いま

大学は大変な時期、ある意味では変貌する絶好の機会にあります。

平成二六年四月には山口大学改革プランを明確にしました。平成二七年度に新学部(国際総合科学部)の設置と教育学部および経済学部の改組を実施します。特に、グローバル化を見据えた新学部設置と文系学部再編により、大学改革の先頭に立ったと自負しております。平成二八年度には人文学部の改組を行うことを明記し、本年度中には改組に関する明確な方針が提示されます。さらに、教職大学院の設置、理系大学院の再編、理系学部の改組、文系大学院の再編、文系学部の改組などの大学改革を着実に実施し、研究分野の改革も同時に行い、社会に求められる大学へとさらに進化する計画です。

山口大学は、一八一五年(文化一二年)に長州藩士 上田鳳陽先生によって創設された私塾「山口講堂」を源流とし、二〇一五年(平成二七年)には創基二〇〇周年を迎えます。国立大学法人の中では三番目に古い歴史を持ち、現在では一万人を超える学生を育成する大学へと進化いたしました。創基二〇〇周年はまさに山口大学を改めて見直す絶好の機会でもあり、創基二〇〇周年の伝統と維新を成し遂げたDNAが、「誇り」と「チャレンジ精神」を呼び起こす時が来たと言えます。創基二〇〇周年の記念事業の一つが、「山口大学基金」(目標一〇億円)の創設です。教職員、同窓生および企業団体等から広く寄付を集め、「長州ファイブ」のような人材育成支援、特に学生の修学や留学の支援および外国人留学生の支援を行うことを目的としています。鴻文会の皆様方には是非ともご賛同いただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。なお、卒業生の皆様に大学に来ていただき、学生時代を懐古していただく「ホームカミングデー」を昨年から開始しました。年一回ではありますが、これには多くの学生が協力しておりますので参加されるのをお待ちしております。

最後になりましたが、鴻文会並びに会員の皆様方のご繁栄を祈念すると共に、山口大学へのご支援を重ねてお願い申し上げます。



山口大学は二〇一五年に 創基二〇〇周年を迎えます

山口大学の歴史を振り返ると、江戸後期一八一五年、長州藩士 上田鳳陽により、山口の地での学問発展を目的に設立された私塾「山口講堂」が創立の基となります。以来様々な学制改革を経ながらも、山口の地で高等教育の中心として脈々と歴史を刻み、地域の人材育成に貢献し、世界で活躍する多くの人材を送り出してきました。

二〇一五年は、「山口講堂」が設立されてから二〇〇周年を迎えることになりました。

山口大学では、先人の「志」をこれからの二〇〇年に向かって繋ぎ、そして、山口大学が発展するために、様々な事業、山口大学基金の創設

創基二〇〇周年記念誌の編纂
山口大学創基の地 記念碑設置
創基二〇〇周年記念 基幹シンポジウム
山口大学ホームカミングデー
フォトコンテスト「写真で残そう！山大なう」などを行っています。

そして、平成二七年五月三〇日に創基二〇〇周年記念式典を行います。

大学関連ニュース

(鴻文会が関わったもの)

第一五回山口大学同窓会理事会

(平成二六年三月三日/ホテルニュータナカ 理事・内田副会長出席)

(一) 第一四回同窓会理事会の議事要旨の確認について

(二) 山口大学創基二〇〇周年記念事業について

・組織体制についての説明
記念事業会の構成員として各同窓会会長の参加・協力

(三) 「山口講堂跡」記念碑除幕式について
・三月二五日開催予定

(四) 平成二六年度ホームカミングデーについて

・一〇月四日開催予定
(五) その他

・監事候補者適任者の推薦について
・同窓会分担金の使用について、
一、〇〇〇万円を創基二〇〇周年記念募金に寄付したい旨の提案を承認。
・その他

山口大学総合図書館増築・改修竣工記念式典

(三月一八日/山口大学総合図書館一階アカデミック・フォレスト 欠席)

山口大学卒業式

(三月二〇日/山口県スポーツ文化センター 岡光会長出席)

山口大学創基二〇〇周年記念事業「山口講堂跡」記念碑除幕式

(三月二五日/山口公設川端市場跡地 岡光会長出席)

山口大学丸本卓哉学長退任記念祝賀会
(三月二五日/ホテル松政 岡光会長出席)

第三回山口大学創基二〇〇周年記念事業会

(五月一六日/事務局一号館特別大会議室 内田副会長代理出席)

(一) 山口大学創基二〇〇周年記念事業の実施体制について

・事業会会長として学長、副会長として創基二〇〇周年記念事業担当理事、会員として理事・副学長、部長、山口大学同窓会会長、学部同窓会会長

・その他

(二) 平成二五年度山口大学創基二〇〇周年記念事業会議事要旨の確認

(三) 創基二〇〇周年記念事業の実施状況について

・「山口大学創基の地」記念碑除幕式
(四) 山口大学創基二〇〇周年記念募金状況について

(五) 山口大学創基二〇〇周年記念事業について

・第四回基幹シンポジウムについて
実施計画の協議
・記念式典について(案)
予定・平成二七年五月三〇日(土) 一四時より一八時、山口グランドホテルにて

・記念誌編纂について
(六) 第二回山口大学ホームカミングデーについての実施計画
(七) 各事業のスケジュールについて
(八) その他

第一六回山口大学同窓会理事会

(五月一六日/事務局二号館特別小会議室 理事・内田副会長出席)

(一) 第一五回山口大学同窓会理事会議事要旨の確認について

(二) 平成二五年度決算報告について
(三) 平成二五年度会計監査報告について
(四) 監事の選任について
・教育学部同窓会の末廣光啓氏、常盤工業会の浜田純夫氏を選出



(五) 平成二六年度山口大学同窓会事業計画について

・第二回山口大学ホームカミングデーへの支援

・その他

(六) 山口大学同窓会会則の改正について
(七) その他

・山口大学創基二〇〇周年記念募金状況

第二回山口大学ホームカミングデー
(一〇月四日/山口大学吉田キャンパス 会員多数参加)

ふと思い出したこと



副会長 内田 光邦

平成二五年八月一七日開催の第九回鴻文会総会において副会長を仰せつかりました。これまでは委員等の経験もありませんが、なんとか任期を全うしたいと思っております。大学卒業後、三八年間の公務を無事に終え定年退職できたのも、陰に陽に皆様方の御支援によるものであり深く感謝申し上げます。お引き受けすることになりました。よろしくお願い申し上げます。

記憶とは不思議なもので、思い出すつもりもないことが、何十年振りか突然に、よいことでも、いやなことでも思い出されます。そのようなことの一つを記してみたいと思います。

私の生まれ育ったのは辺鄙な田舎で、小学校に入学するまでは、七、八軒あった地区の人々の顔以外は知らないような生活をしていました。ところが、小学校に入学すると、家からかなりの距離のところを通学し、社会的な生活の経験も全くなかったのに、全く知らない人々の集団の中に入っていくということで、相当な心理的負担を感じていたように思います。そのような小学校一年生の時でありました。

子どもたちははてなでに学校に絵本を持参しては、担任の先生に休み時間に読み聞かせてもらっていました。私には絵本は一冊もありませんでしたが、家の棚の中に偶然にも古くて埃をかぶった絵本を見つけました。年齢の離れた兄たちが買ってもらって片づけられていたものだったのでしよう。内容は覚えていませんが、ある頁には、多くの人々の前に勇ましく立っている指導者と、彼の弓に金鶏がとまっている絵が描かれていたように思います。この本をこそり学校に持って行くと、先生は狼狽された様子で「これを読んであげることはできないし、そんなことをしたら自分は叱られる」というようなことをおっしゃって、本を直ぐに私に返却されました。古臭い本を持参した恥ずかしさやら、読むことを拒否されたショックやらで、とても悪いことをしてかした後のような惨めな気持ちがありました。先生が読まれなかった理由などが分かるはずありません。

平成一〇年の夏季休業中に、二週間の語学研修・ホームステイに参加する生徒たちと一緒に米国西海岸のシアトル郊外に滞在しました。そこで、ある中年の女性と話をする機会がありました。彼女は高校時代に一年間日本の家庭に滞在しながら高校に通ったそうです。さまざまな話をするうちに、日本の国はいっけなかったのかと質問されました。米国人のように、「一七七六年」と答えるようなわけにはいかないので、その年の皇紀の年号を利用して、今から二六五八年前に神武天皇が全国を統一して即位した時に始まるという答え方もできると応じました。日本史の教科書ではそのように教えていないが、八世紀に編纂された「古事記」や「日本書紀」にはそのような記述があると付け加えました。すると彼女は、自分が日本に留学していた時には誰ひとりとしてそのようなことを教えてくれなかったと不審そうに言います。そこで、「古事記」や「日本書紀」に基づく教育は、戦後は、GHQの占領政策として禁止されておき、占領が終わってからも長く復活しなかったことによるものであろうと応じました。

このような話題で話をしようとは思いませんでした。事前準備もなく不明確な説明と、拙劣な英語ではあったが、相当に興味深く聞いてくれたようでした。小学校一年生の時の思い出が、四八年後に思わぬかたちで私の中でつながっていたということに気付きました。戦争に負けるということは、建国神話(民族のアイデンティティー)までも奪われることなのだと思付いた次第です。

(文理第一五回卒・英米文学)

鴻文会役員

平成二五年八月〜平成二九年八月

名誉会長

根ヶ山 徹(人文学部長)

会長

岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

副会長

内田 光邦(昭四二年卒・英米文学)
兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)
大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)
大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)
田中 晋(昭四一年卒・英米文学)
添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

赤梨 和則(昭四二年卒・西洋哲学)
兼清 仁志(兼)(昭五二年卒・中国哲学)
原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)
山本 明史(昭六三年卒・国史学)
山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)
斎藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)
林田 徳夫(昭五七年卒・社会学)
和崎 睦子(昭六六年卒・社会心理学)
大谷 泰子(昭一三年卒・社会情報論)
正分あゆみ(昭一六年卒・博物文化論)
青島 啓(昭一〇年卒・博物文化論)
鈴木千登世(昭五九年卒・国文学)
藤井 浩子(昭二五年卒・中国語学中国文学)
中村 匡宏(昭九九年卒・英米語文化論)
池田 容子(昭九九年卒・英米語文化論)

平一三年院修了)



井上 恵(平五年卒・ドイツ語学・ドイツ文学)

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学・フランス文学)

中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

監事

村田 博(昭四二年卒・社会学)
渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭(昭四七年卒・ドイツ語学・ドイツ文学)
根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学・中国文学)
村田 裕一(平三年卒・考古学)

鴻文会、この一年



会長 岡光 一浩

昨年八月一七日の総会で選出された新役員のもとで動き始めた鴻文会の、この一年の活動の主だったところを振り返ります。

新体制での本格的な活動のスタートは、正副会長会議(八月二十八日)を経ての、九月一四日の第四三回役員会と会報「鴻文」第三三号の第一回編集会議においてでした。その両会議とも、新スタッフによる今後の活動を推し進めるために開催されましたが、その役員会では、総会の報告や総括に併せて、その年度後半の具体的な活動方針とこれから四年間の事業や予算策定の大まかなガイドラインについて協議し、続いて開かれた会報編集会議では、会報作成のための企画等の検討を行いました。それらの協議・検討内容等については、すでに前会報において触れておりますので割愛しますが、会報は、その後の一月中旬の二度の編集会議を経て、予定どおり、一二月半ばに発行されました。ご覧のように、会報第三三号は総会ニュースを中心に編まれていますが、他にも、この年初めて大学において開催された「山口大学ホームカミングデー」や、総会時に開催されたものを主とした、研究室同窓会や同期会の記事などが目を引きます。

一月一九日に山口大学同窓会理事会が開催されたことは、すでに前号で報告していますが、平成二六年に入りますと、大学関係の様々な行事への出席が続きました。第一五回山口大学同窓会理事会(三月三日)、山口大学総合図書館増築・改修竣工記念式典(三月一八日、欠席)、山口大学卒業式(三月二〇日)、山口大学創基二〇〇周年記念事業としての「山口講堂

跡」記念碑除幕式(三月二五日)、丸本学長退任記念祝賀会(同上)、そして新年度になりまずと、第三回山口大学創基二〇〇周年記念事業会(後記・名称変更、五月一六日)、第一六回山口大学同窓会理事会(五月一六日)が開催されました。それらの多くは、平成二七年五月三〇日に開催予定の山口大学創基二〇〇周年記念事業に関する会議であり、当会報にもその概要を掲載しております。

鴻文会の二六年度最初の役員会は、正副会長会議(五月二日)での準備を経て、五月一七日(土)一四時三〇分よりおよそ三時間、事務所で行われました。その概要を報告しておきます。――私・岡光が平成二五年度事業について報告した後、協議事項に入り、兼清副会長より平成二五年度決算案が提案され、村田監事の監査報告を経て、協議のうえ、これを二五年度決算として承認しました。続いて、岡光より平成二六年度事業計画案が、運営等、会員親睦事業等、母校支援事業等に分けて提案されました。それらには、数名の委員交代や事務所の運営の変更、今年度の留学生奨学金授与の該当者がないこと等、例年とは若干異なるところもありましたが、概ね例年どおりで、協議のうえ、二六年度事業計画として承認されました。なお、この協議の中で、大学からの伝達事項として、従来からの山口大学創基二〇〇周年記念事業のための企画実施部会と支援部会が廃止され、「事業会」として統一され、この委員に各学部同窓会会長が充てられたこと、二〇〇周年のための募金を再度お願いすること、現在作成中の二〇〇周年記

念誌が今年度中に発行予定であること、そして、今年度も山口大学ホームカミングデーが開催されること等々のニュースの報告がありました。また、事業計画の承認後、兼清副会長より、平成二六年度予算案が提案され、協議のうえ、これを承認しました。なお、この役員会で了承された、平成二五年度事業報告と二六年度事業計画の概略や、平成二五年度決算と二六年度予算の詳細については当会報に掲載しております。



役員会の様子(H26/5/17)

その後、今年度は留学生奨学金授与の該当者もなく、九月六日に当第三四号「鴻文」の編集会議を迎えました。現在、編集委員諸氏は二月半ばの完成を目指して奮闘中です。なお、私事になりますが、私・岡光の体調不良ゆえに、年度変わり前後の期間に開催された会議のいくつかに、内田副会長に代わって出席していただきました。お詫びとともに報告をしておきます。

鴻文会会則

(昭和五六年一月三一日制定)

- (総則)
第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七七三―二 沖田ビル二〇二におく。
第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。
第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項(会員)
第四条
1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者

- 2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官(会費)
第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。
第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。
1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 若干名
4. 監事 二名
第七条 役員は次の職務を行う。
1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。
3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。
第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。
第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。
1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項(支部)
第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。
附則
この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。
この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。
この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。

◎平成25年度事業報告

1. 正副会長会議 (5月10日) (8月28日)
2. 第41回 (5月19日)・42回 (7月6日)・43回 (9月14日) 役員会
3. 第9回鴻文会総会役割分担者会議 (8月10日)
4. 第13回 (7月25日)・14回 (11月19日)・15回 (3月3日)
山口大学同窓会理事会
5. 第9回鴻文会総会・懇親会 (8月17日)
6. 会報「鴻文」編集会議 (9月14日,11月19日,11月30日)
7. 第1回山口大学ホームカミングデー
および人文学部教員・在学生・卒業生交流会 (11月23日)
8. 会報「鴻文」第33号発行 (12月15日) および配布
9. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3月20日)
10. 山口大学創基200周年記念事業「山口講堂跡」記念碑除幕式 (3月25日)
11. 丸本卓哉山口大学学長退任記念祝賀会 (3月25日)
12. その他

◎平成26年度事業計画

1. 正副会長会議 (5月2日)
2. 山口大学創基200周年記念事業会 (5月16日)
3. 山口大学同窓会理事会 (5月16日)
4. 役員会 (5月17日)
5. 留学生奨学金授与式 (該当者なし)
6. 会報「鴻文」編集会議 (9月6日,11月8日)
7. 第2回山口大学ホームカミングデー
および人文学部教員・在学生・卒業生交流会 (10月4日)
8. 会報「鴻文」第34号発行 (12月予定)
9. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3月20日)
10. その他

◎平成25年度決算

収入総額	5,037,638円
支出総額	3,285,033円
残高 (次年度繰越金)	1,752,605円

◎平成26年度予算

〈収入の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
繰 越 金	931,158	931,158
会 費 収 入	1,800,000	1,580,000
繰 入 金	2,000,000	2,000,000
費 助 金	300,000	305,520
総会懇親会会費等	0	220,000
雑 収 入	8,842	960
合 計	5,040,000	5,037,638

〈収入の部〉

科 目	26年度予算額	摘 要
繰 越 金	1,752,605	
会 費 収 入	1,800,000	10,000×180人
繰 入 金	0	特別会計より繰入
費 助 金	300,000	
雑 収 入	7,395	利子等
合 計	3,860,000	

〈支出の部〉

科 目	25年度予算額	決 算 額
会 議 費	150,000	95,292
役 員 等 行 動 費	100,000	53,400
事 務 所 運 営 費	850,000	884,675
事 務 費 ・ 通 信 費	150,000	129,634
会 報 費	700,000	674,456
ホ ー ム ペ ー ジ 維 持 費	50,000	27,084
分 担 金	151,000	150,840
寄 付 金	100,000	100,000
奨 学 金	151,000	0
助 成 金	150,000	40,100
慶 弔 費	50,000	15,539
総 会 費	1,000,000	1,020,953
予 備 費	1,438,000	93,060
合 計	5,040,000	3,285,033

〈支出の部〉

科 目	26年度予算額	摘 要
会 議 費	100,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役 員 等 行 動 費	100,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事 務 所 運 営 費	850,000	家賃、人件費、事務所経費 (電話・電気・その他) 横断幕
事 務 費 ・ 通 信 費	150,000	封筒印刷6,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会 報 費	700,000	印刷6,300部、発送5,500通、発送アルバイト代
ホ ー ム ペ ー ジ 維 持 費	50,000	プロバイダー契約料、メールウイルスチェック料、その他
分 担 金	151,000	山口大学同窓会 (手数料含む)
寄 付 金	100,000	山口大学教育財団「日中学術交流基金」
奨 学 金	151,000	留学生への支給 (手数料含む)
助 成 金	100,000	「同窓会等」開催助成 (手数料を含む)
慶 弔 費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
総 会 費	0	
予 備 費	1,358,000	
合 計	3,860,000	

〈特別会計〉

科 目	24年度財産	25年度財産
中 国 電 力 債	1,465,537	1,465,537
定 額 預 金	4,950,000	2,950,000
合 計	6,415,537	4,415,537

〈特別会計〉

科 目	26年度財産	摘 要
中 国 電 力 債	1,465,537	東洋証券
定 額 預 金	2,950,000	
合 計	4,415,537	

平成26年4月22日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博
渡邊 早苗

人文学部教育職員紹介

(平成二六年一月現在)

学部長(併)

根ヶ山 徹

○人文社会学科

哲学・思想コース

教授 高木 智見
 教授 脇 靖弘
 教授 Alan Djumali
 教授 柏木 寧子
 教授 藤川 哲
 准教授 栗原 剛
 准教授 村上 龍
 准教授 横田 蔵人

歴史学コース

教授 橋本 義彪
 教授 馬本 晋作
 教授 田中 二郎
 准教授 滝野 正
 准教授 藤永 康
 准教授 真木 隆
 准教授 村田 裕一
 講師 池田 勇太
 講師 石田 泰輔
 講師 南雲 俊輔

社会学コース

教授 坪郷 英彦
 教授 横田 尚俊
 教授 高橋 征仁
 教授 速水 聖子
 准教授 岡邊 健

○言語文化学科

日本語学・日本文学コース

教授 林 伸一
 教授 平野 芳信
 教授 和田 学
 教授 森野 正弘
 准教授 尾崎 千佳
 講師 安本 真弓

中国語学・中国文学コース

教授 阿部 泰記
 教授 富平 美波
 教授 根ヶ山 慎一
 准教授 更科 徹

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三
 教授 太田 聡
 教授 宮原 一成
 教授 池園 宏志
 准教授 赤羽 仁志

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 本田 義昭
 教授 Hintereder Emde Franz
 教授 武本 雅嗣
 准教授 下寄 正利
 准教授 De Boissieu Michel

言語情報学コース

准教授 Phillips John David
 准教授 乾 秀行

図書館司書養成課程

准教授 松田 泰代

祝 瑞宝中綬章叙勲

関 一雄 先生
 (山口大学名誉教授・国語学)

山本和之 先生
 (山口大学名誉教授・英語学)

このたび、関一雄先生には平成二六年度春の瑞宝中綬章を、山本和之先生には平成二六年度秋の瑞宝中綬章を叙勲されました。両先生の榮譽をたたえ、心からお慶びを申し上げます。

学生数

(平成二六年一〇月現在)

人文学部

人文科学研究科

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	100人	91人	191人
2年	99	89	188
3年	99	93	192
4年	124	124	248

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	4人	3人	7人
2年	2	2	4

平成二五年度 学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	6人	
生活関連サービス業	5	
教育・学生支援業	15	2
医療・福祉	4	
複合サービス事業	1	
サービス業	9	
公務	16	1
上記以外	3	
進学	5	

	学部卒業	大学院修了
建設業	3人	
製造業	9	
情報通信業	5	
運輸業・郵便業	2	
卸売業・小売業	30	
金融業・保険業	10	
不動産業・物品賃貸業	2	
学術研究・専門技術サービス業	4	

ご退任教員挨拶

私と研究の「縁」



阿部 泰記

私が山口大学人文学部に赴任したのは昭和五六年一〇月でした。それから三三年が経過し、私もついに退職の年を迎えました。

最近、「縁」という言葉を中国の社会学者から聞いてつくづく思うのですが、現在の私の専攻は必ずしも自分から選ぶことができたわけではなく、環境が導いてくれたと言えましょう。

まず日本には漢籍が多く、私が中国文学を専攻するのに適していました。日本人は漢文読みを得意としており、その方法で学ぶことができたのです。

ただ日本人は「白話」(口語文)が得意ではありませんでした。しかし私は幸運なことに、赴任して二年後に山東大学で一年間研修し、この難関を克服する「縁」を得ました。当時はまだ研究資料を見る条件が整っていませんでしたが、それはそれで街に出て中国語を鍛錬することができたのです。また山東では私たちの学ぶ「中国語」(北京語)が話されず、初級程度の実力しかなかった私には必ずしも適地とは言えませんでしたが、北京でも教科書で習った「中国語」だけでは日常に適應することは困難であることも分かりました。私は帰国して衛星放送を見始め、言葉に習熟することに努めて、中国事情にも注意を払いました。

山口大学図書館に徳山毛利藩の旧蔵書を蔵していたことも、私の研究に「縁」をもたらしました。当時、学界では小説を研究する機運があつて、私はその機運に乗って毛利藩旧蔵書をはじめとして多くの資料を収集しました。

また日本には中国の伝統演劇の資料は多くは

ありませんでしたが、九〇年代になると中国の開放政策が進展して、公共図書館で演劇資料を見ることができるようになり、演劇を上演する民間の廟宇を調査することもできるようになりました。私は平成一四年度に長期海外研修の「縁」によって、中国の図書館や廟宇の調査を開始し、日本と中国の資料を整理して学位論文を完成させました。

私はそれ以後、民衆教化に関する研究をするようになりましたが、これも小説研究が「縁」でした。中国で紹介された一篇の作品が小説だと解釈されていましたが、私はそのころ出版された参考書によって、それが民衆教化のテキストであることを知ったのです。これは時代が「縁」となったと言えましょう。これを機に私は中国に調査に赴きましたが、研究対象はますます一般漢籍から遠ざかりました。民衆が使用する土地の言葉、すなわち方言を聞き取ることが必要となったからです。土地の人々は歓迎してくれましたが、十分に聞き取れないことに申し訳ない気がしたものです。民衆を教化するためには民衆に溶け込まねばならないというのが、伝統的な儒教思想でした。言語を通じて民衆に溶け込むことはかなり難しいことでしたが、地方官は方言を理解し、方言を用いた歌謡で民衆を教化することに努めたのです。

私は地方官でもありませんし、中国は広大方言が様々であり、すべての地域の言語を理解することは不可能に近いことですが、研究者として、研究対象とする地方の言語は理解できるようにするよう、退職後も努めていかなければならないと考えています。

山口大学に赴任して中国・台湾・韓国など東アジア地域との学術交流に携わることが多かつたと思います。二〇〇四年から人形劇・歌唱芸能・民俗学の各方面の方々には多くのことを教えていただきましたし、山口大学にはそうした「縁」を授けていただきました。心から謝意を表したいと存じます。大変お世話になりました。末尾ですが、鴻文会の皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げます。

(中国語学・中国文学コース 教授)

阿部泰記先生のご退職記念行事のお知らせ

(一) 阿部泰記先生最終講義

日時 平成二十七年三月七日(土)

午後三時から

場所 山口大学人文学部小講義室

演目 私と研究の「縁」

(二) 阿部泰記先生退職記念パーティー

日時 同日 午後六時から

場所 セントコア山口

主催 山口大学人文学部

中国語学・中国文学研究室

退職にあたって



本田 義昭

私が山口大学に赴任したのは一九七八年の一〇月で、それから三十六年が経ちました。学生時代と合わせると四〇年になり、これまでの人生のほぼ三分の二を山口大学で過ごしたことになります。

在職した前半の一八年は旧教養部のドイツ語科に所属して、全学部の学生を対象に主にドイツ語を教えていました。大学入学まで学んだことがなかったドイツ語学習を通じて、それまで知らなかった新しい世界に触れることができたと言ふ学生もクラスに何人かは確実にいました。

中には夏休みにドイツへ旅行してその体験記を自費出版した人や、学生時代から現在まで

何度もドイツ旅行をしている人もおり、少しはお役に立てたかなと思っています。

後半の一八年は人文学部のヨーロッパ言語・文学コース(旧独仏語文化論コース)に所属しました。山口大学は約一〇年前からドイツのエアランゲン大学と大学間協定を結び、独文研究室からも毎年一、二名の学生が一年間の長期留学に出かけています。留学中にドイツ人だけでなく他の国から来た外国人の学生と知り合うことで、さまざまな異文化に触れ、母国日本を客観的に見る目が養われるようです。エアランゲン大学からも毎年留学生が来ていますので、山口大学の学生と一緒に萩や宮島へドライブに出かけたりパーティーを開くなどして交流の機会を作ってきました。ある時一人の日本人学生が「私はバウムクーヘンが好きです」と言うと、ドイツからの留学生が「バウムクーヘンは山口に来て初めて食べました」と答えたので、居合わせた日本人学生たちが唖然としました。彼女によると、バウムクーヘンはドイツ東部の一部の地域の名物で、エアランゲンなどドイツ西部の街のケーキ屋にはあまり売っていないそうです。ドイツが地方分権であることを一岡改めて気づかされました。また別の機会に、ある留学生が初めて海を見たのは一三歳の時だと言いました。これにも皆が驚きましたが、ドイツは北部だけが海に面しており、エアランゲンは海から五〇〇キロ以上離れた内陸部に位置しています。エアランゲンがあるバイエルン州で生まれ育った人なら、海を見ないまま成長することも十分あり得ます。

このように、自分が当たり前だと思っていることでも他の人や他の文化から見れば当たり前ではないことがしばしばあります。私の授業でも時折このことに触れていますが、異文化に触れる面白さに気づいたと言ふ学生が毎年何名もいて私も嬉しくなります。

三六年という年月は世代交代するほどの長い期間です。山口大学は変わっていないように見えるかも知れませんが、教員の生活は大きく変化しました。赴任した当初は教員の仕事は教育と研究だと言われていました。それ以外の仕

事で忙しいのは学部長や評議員など一部の教員に限られていました。ところが、国立大学が法人化した一〇年ほど前からはこの二つに加えて大学・学部運営の仕事が大きな柱となりました。今ではどの教員も複数の委員会に所属しており、ほとんどの委員会が一年中動いています。私は不器用なもので、同時並行で複数の仕事をこなすことができません。以前は周りにも私のような教員が少なからずおられたようですが、いつの間にか完全に淘汰され、今はだれもがどんな仕事もできるとこなせる有能な方ばかりになりました。すっかりガラパゴス化していますが、ゴールまであと数か月、なんとか頑張ろうと思います。

（ヨーロッパ言語・文学コース 教授）



改修を終えた人文学部

湯川洋司先生が、ご療養かなわず、平成二〇年九月三〇日逝去されました。平成二〇年七月から平成二四年三月まで人文学部長を務められ、人文学部のためにご尽力されました。また、その間、鴻文会名誉会長としても本会に対し、お力添え下さいました。ここに在りし日の湯川先生をしのび、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ご新任教員挨拶

三度目の盆地生活



南雲 泰輔

二〇一四年四月一日付で人文学部人文社会学科歴史学コースに西洋史(ヨーロッパ史)担当の講師として着任いたしました南雲泰輔と申します。専門分野は西洋古代・中世史、より具体的には後期ローマ帝国史・初期ビザンツ帝国史です。学生時代以来一二年間を過ごした関西から離れ、このたび山口へ移って参りました。私にとって山口は、故郷からたいへん遠く、もとより初めての土地でもあるのですが、京都で一〇年、そのうち奈良で二年暮らしていましたので、「夏暑く、冬寒い」盆地での生活という点に限ってみれば場所を変えて三度目、通算して一三年目になります。山口の別称が「西の京」であることを思えば、あるいは三度目の「みやこ暮らし」とすべきかもしれません。

さて、本年三月に人文学部棟の改修工事が終わったばかりとあって、着任と同時に、思いがけず真新しい教室と整った設備のなかで教育と研究を開始できるという幸運に恵まれました。とは言うものの、古い時代の歴史を研究対象とする自分にとって、そうした新しさはどこかそわそわした印象を与えるものであったこともまた事実であり、実際今日にいたるまでの約半年間、人文学部棟では引越しの後片付け・種々の点検・整備が断続的に実施され、また私自身も授業の準備や初めて経験する各種業務の数々、割り当てていただいた個人研究室の整理整頓に四苦八苦するなど、月並みな表現ですがたいへん慌ただしい日々が続きました。

しかしそうした慌ただしい気分も、毎日ぼつぼつと自宅から運び込んだ本やファイル類の見慣れた背表紙が研究室の書架にそれぞれの居場所を得てゆくのと併せて、少しずつ落ち着いてきたように思います。その間、同僚の先生がたや事務の方がたには、事柄の大小を問わず不躓な質問や相談にも的確・懇切に応じてくださったり、新参者が不安を抱くことの無いよう温かなお心遣いを頂戴したりと、感謝に堪えませんが、つたない授業に辛抱強く耳を傾けてくれたる学生の皆さんにも、今後一層の精進を誓いつつ、この場を借りて改めて深くお礼を申し上げます。

ところで、夏休みの前に西洋史学生研究室の蔵書点検を行いました。その時にたまたま見つけた『山口大学五〇周年記念誌(通史)』(山口大学、一九九九年)によれば、山口大学文学部・人文学部で教鞭を執られた西洋史歴代の先生方のご専門はほぼすべて近世以降の歴史、特に近代史が中心で、「山口大学の西洋史では手薄な分野である古代史・中世史」を主たる専門とする専任教員としては、どうやら私が初めての着任となるようです(同書一三四〜五頁)。その意味でも新しい出発点に立つことになったわけで、責任の重さを実感しておりますが、まずは研究・学習の環境を整備するところから、着実に取り組んでゆきたいと考えているところです。

昨今の大学をめぐる現状は一層厳しさを増しており、先般の各種報道でも国立大学の文系学部消滅の可能性が取り沙汰されました。人文学部の学問は「社会的要請」の極めて低い、無用の学問なのでしょうか。国立大学では学ばれる必要のない学問なのでしょうか。こうした問いに対し、その是非についてもっとも強い発言力を持つのは、人文学部で学ぶことを選ばれ、人文学部で学ばれたご経験を糧として、今まさに「社会」のなかで活躍中の鴻文会の皆様であろうかと存じます。ご助言とお力添えを賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

(歴史学コース 講師)

私の研究



Michel de Boissieu

本稿では、私の研究を紹介したいと思う。専門分野はフランス近代文学、日本現代文学、比較文学である。

フランス文学において主に一九世紀の小説、特にバルザックの作品『サラジヌ』という短編小説における「死」と「生」に関連するモチーフを研究してきた。「死」と「生」をめぐる夢想がどのようなレトリックを用いて展開されているかを分析している。つまり、語り手「私」の夢想は「死」と「生」のモチーフを主旋律とするフーガのように、老と若、醜と美、陰と陽、寒と暖、と対照的なイメージを展開しながら、さまざまヴァリエーションによって繰り返されている。また、それによっていかに絵画イメージが喚起され、さらには登場人物および語りそのものがいかに審美化され、一種の「芸術作品」へと変容していくかを検討している。「メント・モリ」や「アドニス」の絵」などの芸術作品が死のメタファーとして、あるいは永遠の美のメタファーとして小説において用いられているのである。

また、日本の映画、特に小津安二郎の作品を通じて日本文学にも関心を持つようになった。大岡昇平文学や村上春樹などを研究し、特に大岡昇平の『野火』や『浮城物語』について研究を進めている。大岡はアイロニーを重要な風刺の方法として使っていることに関心を持ち、分析を行っている。大岡作品におけるアイロニーがただの反語ではなく、意味のずれ、矛盾、対立の関係など複雑なアイロニーの構造をつくり上げる過程を解明して研究を深めている。例えば大岡は『浮城物語』において自分の浮城体験を題材にしているが、「浮城収容所の事実を藉りて、占領下の社会を風刺するのが、意図であっ

「た」と書いている。大岡はアイロニーを重要な風刺の方法として使っている。そのアイロニーはただの反語ではない。むしろ意味のずれ、すなわち矛盾、対立の関係などに基づく複雑なアイロニーの連鎖である。つまり、ある言葉と、その言葉が示すはずの事実の間にずれや矛盾が現れることによって、浮屠社会の本質と同時に、そのアイロニーとしての戦後日本社会の現実が明らかになるということである。こうして、大岡のアイロニーは、誰でもよく知っているはずの観念の意味と使い方について再考させるのみならず、『浮屠記』のテキスト全体の構成においても重要な役割を演じているのである。博士論文に大岡昇平文学を軸に戦争文学の議論を広げて研究をまとめる予定である。

最後に、日本文学やフランス文学両方を研究してきて、やはり比較文学も視野に浮かび研究対象にしている。こうして大岡昇平の作品におけるフランス文学、特にスタンダールやモンテスキューの受容を分析している。どのように大岡の書き手がフランス文学の影響を受けたかという問いを重視している。例えば『浮屠記』中の最も有名なエピソードである主人公と敵兵の戦場での遭遇の場面を、『パルムの僧院』中の類似したエピソードと比較することによって、その読み直しを提案することになる。ここで大岡が、愛読する作家スタンダールの影響を受けているのは確かだと思われる。というのも、大岡は三つの印象的な文学手法を借用しているからである。冒頭から場面の結末を予告する「反ロマネスク」の技法、映画の「移動撮影(トラヴェリング)」の技法による描写、物語の構成において「理念」に与えられるきわめて重要な役割、がそれである。しかし、大岡がこうした技法を借用したとしても、最終的に彼が書きあげたのは、スタンダールの小説とはまったく異なるタイプの作品であった。大岡は、モデルとなった作品の「叙事的」文学から遠く離れ、独自の分析的な文学を作り上げたのであった。(ヨーロッパ言語・文学コース 准教授)

平成二六年度 山口大学人文学部 生涯学習事業

山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度、次のような事業を行っています。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)
人文学部の特色を生かした公開講座として平成一三年度に始まり「やまぐちサタデー・カレッジ」も、お陰様で今年一四年目を迎えました。今年度は前期一講座、後期一講座の計二講座を開講し、総計六〇名ほどの方々に聴講いただきました。山口市周辺だけでなく、県内の遠方からの受講者もいらつしやいます。

前期 四月一九日～五月一七日
(土曜日 計四回) 一三:三〇～一五:〇〇
会場 山口大学・OHARA山口大学就職支援室
橋本義則教授
「遺跡は語る」

一 古代日本のみやこ概観
(発掘調査の成果と現状)
二 東アジアの中の古代日本のみやこ
(写真と図版でめぐる)
三 遺跡は語る(一)
(天皇の住まい内裏の変化歴史を読む)
四 遺跡は語る(二)
(譲位した天皇Ⅱ上皇の住まいのあり方に歴史を探る)

内容
第二次世界大戦後の急速な経済発展によって「古代日本のみやこ」の発掘調査は大いに進捗しました。まずはその成果と現状を簡潔に紹介いたします。また、ここ数年の間に踏査した東アジアの都城遺跡を写真と図版を用いて紹介し、東

アジア世界の中での「古代日本のみやこ」についても考えてみたいと思います。一方、「古代日本のみやこ」を考える上では発掘調査の成果だけでなく、文字で書かれた文献史料も重要な資料です。文献史料と発掘調査の成果を用いて、「古代日本のみやこ」の遺跡の変化に歴史を読んで見たいと思います。



後期 十一月一日～二二日
(土曜日 計四回) 一三:三〇～一五:〇〇
会場 山口大学人文学部
池園 宏教授
「一九世紀イギリス物語絵画を英語で読み解こう」

一 イントロダクション他
二 J. E. ミレイ『イザベラ』
三 H. A. ボウラー『懐疑』
四 R. B. マーティノー『旧家の最後の日』

内容
イギリスでは一九世紀ヴィクトリア朝時代に物語絵画(narrative painting)と称される風俗画が多く描かれました。本講座では、物語絵画に関する英文テキストをもとに、当時の絵画に内包された物語を楽しく読み解いていきたいと思います。英文読解力の向上と異文化理解を目的とした、受講者参加による演習形式の授業です。



来年度も前期・後期に開講する予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。
山口大学地域連携推進センター、
電話083-9333-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>

(二) 山口大学公開講座(防府市)
一 昨年度から防府市の生涯学習事業に参加することになりました。一〇月四日(土)と一〇月一八日(土)に防府市文化福祉会館にて次の講座を実施しました。

馬 彪教授
「もう一人の秦の始皇帝と彼の巨大遺跡」

内容
「極悪非道と言われることも多い始皇帝ですが、最新の木簡や遺跡研究によって、違った一面が見えるようになっていきます。そこで本講座では、今まで『史記』や現代の教科書の記述でしか語られていなかった始皇帝の、本当の姿を紹介しました。内容は始皇帝の遺跡はなぜみな「巨大」なのか。その「統一」の裏には彼の苦悩や人間らしい弱さがありました。講師本人が遺跡現場で発見した「もう一人の始皇帝」を紹介しました。

- 一〇月四日(土) 一〇:〇〇〜一一:一五
- 一 日本人と同種かもしれない秦の始皇帝
- 同日 一一:一五〜一二:三〇
- 二 始皇帝の作った模擬宇宙的な帝国
- 一〇月一八日(土) 一〇:〇〇〜一一:一五
- 三 巡幸のハイウェイ・禁苑と祭祀
- 同日 一一:一五〜一二:三〇
- 四 始皇帝の人間くささ

彼の喜・怒・哀・楽



(三) 出前講義

山口大学では、大学教員が各地の学校に向いて専門的な内容をわかりやすく講義する、いわゆる「出前講義」を実施しております。

今年度、人文学部教員が出講した出前講義は、山口県内の高校を中心に、計五件(一二月末まで)ありました。

来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載した資料がありますので、お気軽にお申し出ください。

(山口大学地域連携推進センター、

電話083193315059

<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(四) 開放授業

大学の授業そのものを一般の方に開放する「開放授業」はエクステンションセンターの事業として平成一八年度から始まりました。

人文学部では今年度計八件の授業(一二月末まで)を開放しました。

科目名や科目数などは未定ですが、来年度もいくつかの授業を開放する予定です。詳細は地域連携推進センターのホームページをご覧ください。

(山口大学地域連携推進センター、

電話083193315059

<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(人文学部生涯学習推進室長 馬 彪教授)



総合図書館 内部



研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を()内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

同窓賛歌

私の英語人生



磯部 薫

私は昭和十九年、山口経済専門学校（現在の山口大学経済学部）を卒業し、一年間のつらい兵役から帰って、幸運にも昭和二〇年一〇月から、下関市立下関商業学校の教諭として赴任することができた。しかし英語教員の免状がないばかりに英語が担当できず、つらい二年間を過ごした。ところが当時、新聞で、たまたま独学者のための中等教員検定試験が文部省主催で行われるとの報道に接し、欣喜雀躍、直ちに準備にとりかかった。昭和二年八月、第一回中学校高等女学校教員検定試験を受験し、山口県では、一三名中、私だけが合格という幸運に恵まれた。山口県教委からの命令で、私は昭和二四年から、昭和三七年まで、県立山口高校の英語科教諭として赴任し、好きな英語を担当できて縦横無尽に教えることが出来た。その後暫らくの間は、米留学を夢見て、私の頭は英語の実践面に傾いた。留學生試験を数度受けたが、いずれも失敗。しかし、この事が不幸に見えて実は幸運となり、英語を学問的に研究したいという野望が、かき立てられることとなった。山口高校で英語を教えるかたわら、興味の対象である「英語学」研究に全力を傾注した。英語学の最高峰、デンマークのイエスペルセン博士の「文法の哲学」をたまたま読んだ時、この書物からショックに近いものを感じ、徐々に、私はもう一度大学に入り直して英語学を徹底的に学問的に研究してみたいという気持ちに傾いた。しかし私は念願の計画を思い切っって実行に移すべきか否かに迷ったが、遂に私はこの計画を決然と実行すべきことを決め、妻や原教委の同意と山口大学文理学部の英語担当教授の

御好意により、大学で英語を勉強することが出来るようになった。当時、私は三七歳であったが、私にとっては、千載一遇の機会であると思つた。大学では、専門科目として、英文学史、ザンドボルト、ハズリット、キーツ、アイルランド文学、聖書、ギリシャ語、ポーブ、ポッター、シェイクスピアなどを学んだ。二年間の学生生活は、夢の中にいるようだった。と同時に、私の人生の中では、最もりの多い時期でもあった。田中教授による通時的観点からの文法現象の説明、岡崎教授によるシェイクスピアのジュリアス・シーザーの文学的側面の分析、小倉教授によるキーツの美しい叙情詩の流れるような講義など、新しい世界が次々と展開し、講義ごとに、私の心は喜びと期待に包まれた。三年次生の時、米国の詩人ストライク教授から米文学を習った。教授は講義の時、作品の意味上の説明だけでなく、文学的・心理学的分析を行い、示唆にあふれた授業であった。シェイクスピアの神の如き言語学的テクニクに取りつかれ、その素晴らしさと創造的天才、大胆な隠喩、鮮やかな性格描写、多彩な語いなどに魅せられ、卒論としては「修辞学者としてのシェイクスピア」を取り上げることになった。それは四年次の前期であった。四年次のクラスでは、卒論の仕事や九大学院の入試の準備に追われた。私はダイトンやシュミットの辞書の助けを借りて、シェイクスピアの作品を一つ一つ丹念に読んで行った。冬休みの間、あらゆる空き時間を卒論の完成に当てた。四年次の後期試験が始まり、健康を損ねはしないかとも心配した。昭和三九年三月三日、九大から大学院合格の嬉しい知らせが届いた。これからは、力の及ぶ限り、希望を抱いて努力しよう決心した。この二年間、私を励まし助けてくれた英語関係の諸先生方と、妻と母に、深い感謝の意を表したいと思つた。

(文理第一二回卒、英語学)

我が内なる「やまぐち」



栗原 宏

後河原の学舎を離れてはや半世紀、今も恩師の柔らかい京都弁が心地よく耳にこびり付いている。入学した昭和三五年は、安保騒動の最中にあり、デモや学生集会と落ち着かない毎日を送った。文学科最初のコンパを湯田の山泉荘で開き、幹事役を務めた。二〇名前後の出席者は、入学の動機もそれぞれであったが、青春の志に燃えていた。意気の合った三名で早速学習会を開き、専門科目に備えた。順調に滑り出した一〇月に、浅沼社会委員長が刺殺されるテロが起き、恐怖と不安の中、学習会を閉じた。今、内なる山口を顧みると、この狭いキャンパスが自己の骨格を形づくる大切な舞台であったことがよく判る。学業、サークル、寮生活などの各ステージで多くの友人や先輩と混じり合い、生きる喜び、学ぶ喜びを享受できた。

昭和三十六年、小畑先生の病気休職中に研究室入りが決まる。講義、演習など専門科目の授業は開かれず、所属の一五名は所在なげに日を過ごした。ただ、研究室対抗のソフトボール大会には顔を揃え、高校球児でもあったY君の活躍で日頃の鬱憤を晴らした。学部当局は、当該学生の学習環境の劣化を思量して、集中講義のコマを増やし、九州大学から日野教授を立て続けて招聘した。先生は唐時代の社会経済を正史を分析しながら丁寧に講義され、我々を魅了した。薫陶よろしきを得たが、心の隙間は満たされなかつた。そこで、教育学部での講座受講を申請し、高村教授の外国史演習に参加させて貰った。先生のご英断と社会科学のゼミ生には感謝している。

先生との出会いは、引越しの手伝いに始まる。宮野の旧宅に山と積まれた蔵書の量にまず圧倒され、授業に逸る気持ちをぐっと抑えた。やがて研究室に活気が戻り、漢籍に難渋しながらも発表の順番を心待ちにする自分がいた。ガストロブを挟んで先生の回りに輪ができた。学識と人柄にゼミ生が敬服した証だつたと思う。しかし、先生の指導は厳しかった。卒論の質疑応答には、容赦なく質問を発せられ、答えに窮した私は、脂汗を滂ませ勉強を恥じた。学業を甘く見るなよとの警告を、めがねの奥に強く感じた。以後、先生を研究者としては勿論のこと、人の心に灯を燈すすばらしい教育者として敬っている。

一方、鳳陽寮では文科・経済の寮生と起居を共にし、執行役員も経験できた。寮生の最大の関心事である食堂の管理運営を任せられた。業者委託から学生の自主管理へ移行して四年目とは言え、素人には経営は難しく、留年覚悟の仕事であった。この任務が終わると退寮した。アルバイトのなかで最も印象深かつたのは、駅通りにある新聞社（山口支局）での仕事だった。選挙のたびに声がかかり、選挙報道の在り方に関心が高まり、その方向への進路を志向したこともあったが、かなわなかつた。

退職後しばらくは近くの公立大学で教職を志望する学生への支援活動に携わって来たが、七五歳の現在、新たなテーマを自身に課している。

三年前、政府主催のフィリピン慰霊巡拝団に参加して、父親が眠るレイテ島など四島を訪れた。かの地には今も苦むしたまま祖国に帰れないで眠っているおびただしい戦没者がいる。しばらくはこの国の墓標を訪ねて鎮魂の誠を捧げたい。

(文理第一二回卒・東洋史学)



人生の出会いをつくって くれた山口大学

山中 太

山口大学を卒業して三〇年が経ちました。昨年一月に山口大学教育学部附属山口中学校で行われた研究発表会に参加した時、私は少しの時間を見つけて大学近辺を散策してみました。毎日のように歩いた大学通りは、洒落た通りに様変わりしていました。文楽堂は移転しており、丸久や人文学部裏にあった通称「ばあちゃん店」や徳光商店はなくなっていました。風景の大きな変化に、長い時間が経ったことを痛感させられました。しかし、そんな様変わりした大学通りでもひとたび降り立てば、一瞬で大学生だった頃の自分を思い出すことができました。

当時私は、平井にあったアパートから自転車で人文学部まで通っていました。もちろん講義や演習は受けていましたが、一日のほとんどは西洋史研究室で過ごしていました。入ったばかりの二年当初は、授業以外で立ち寄ることはなかったのですが、友人の誘いがあり二年生の終わりごろから行き来するようになっていました。研究室の仲間とは、空き時間にいろいろな話をしました。当時、西洋史研究室には「ダベリング」という雑記帳があって、室生たちが自由に書いていました。映画のこと、本のこと、日々の様子。くだらない内容もありましたが、悩みなども書いていた記憶があります。今も残っているならば、是非読んでみたいものです。あの頃の自分はどんなことを考えていたのだろうか。夕方になると、研究室に残ったメンバーと一緒に夕食に行ったり、ボウリングを楽しんだり、萩や長門までドライブなどもしていました。深夜に萩に行き砂浜で焼き肉をした思い出もあります。このような遊びの思い出ばかりでなく、研究室では、七夕祭りの出店や夏休みの阿蘇合宿や大学祭での映画上映、長門峡



へのもみじ狩り、研究会報「アゴラ」の発行など、仲間と一緒に活動する喜びを数多く経験しました。今考えると、西洋史研究室で出会った人たちが今の自分にとって大きな財産となっています。仲間と毎晩のように酒を飲み、大いに語り、大いに悩んだことが自分を変え、そして成長させたのでしょうか。

特に、山口房司先生には、大変お世話になりました。当時先生が単身赴任なのをいいことに、先生を居酒屋に連れ出し、仲間と一緒に頻りに酒を飲んだ日々は忘れることができません。四年生の時、そんな酒の席で「山中、おまえは教師になったほうがええぞ（大阪弁）」と言いつけられたのも、山口先生でした。その時は、教師の道など微塵も考えておらず反対したのですが、現在、教師という仕事についての事実を考えると、先生のアドバイスは、私の意識に存外強い影響を及ぼしたのかもしれない。

そんな私も、教師の道を歩み始めて今年で二八年になります。担当科目は社会学ですが、一五年ほど前から道徳授業の面白さに目覚め、全国のサークル仲間と共に、中学生の心に響く

ような道徳授業を作るべく奮戦する日々を送っています。『とっておきの道徳授業 中学校編 ①』『②』（共著 日本標準）や『良い行いを導く道徳授業』（単著 日本標準）などの書籍を出版し、全国の先生たちに広げる努力もしています。また、将来教職に就きたいと考えている大学生に、学校現場の空気を伝えたいと考え、毎年、長崎大学や長崎県立大学や東亜大学に向き、実際に道徳授業を行ったりもしています。

今の自分があるのは、山口大学四年間に出会った先生や研究室の仲間のおかげです。専門の西洋史学についてはあまり深く学ぶことはありませんでしたが、人間として成長させてくれた大切な時間だったとつくづく思います。そういった意味でも山口大学に感謝しなければいけないと思います。

（人文第四回卒・西洋史学）

教育実習の思い出

田中 伸

【最初はどんななおじいさんが来られるのかな？と不安に思っていたが、意外におじいさんという感じでは無く倉工の大先輩で、話しやすそうなおじいさんが安心した。（中略）】
 ぼくは青春時代とか何とか言って遊びほうけているのに田中先生は退職した後も勉強して大学に行くなんてすごい人だと思った。倉工祭のとき、色々話をしてくださってありがとうございました。（以下略）

教育実習に行った福岡県立小倉工業高校の生徒の一人、N君が書いてくれた感想文である。実習は平成一三年六月一日からの二週間、このときの私の年齢は六四歳、それで生徒たちの心境を率直に語っているのがこの感想文である。実習科目は「現代社会」。実は高校時代の私は社会学が嫌いで欠点に近い点数だったので、

その雪辱のための意地でこの科目の教員免許への挑戦を試みたのである。

実習指導のM教諭は私の息子と同年代、父親を指導するような事態に戸惑いがあったようであるが、それでも、少しばかり凝り性の私が翌日の授業の進め方の演習をするのを放課後遅くまで付き合せて、実に親切丁寧にご指導くださった。

* * *

実習期間中に学校の一大イベントである倉工祭が開催された。倉工祭は、グラウンドの一部に各科毎に装飾を凝らした屋台を建てて、焼きそば、たこ焼きなど生徒たちがそれぞれに腕をふるった料理の競売が行われ、中には独特のリズムと音声で、北九州名物「バナナの叩き売り」をしている屋台もあって実に楽しかった。授業中居眠りばかりしている生徒達が屋台の組み立て、飾り付け、調理を実に手ぎわ良くさばくのには感心した。私が彼らの仕事ぶりを頼もしく眺めていると前出のN君が「田中先生」と声をかけてきた。

「先生、ぼくは就職希望なのですが、好きな仕事ができそうな企業からの求人がないので進学しようかと思ってるんですけど……」。

N君の相談に、次のような私の体験を話した。

【就職の機会を待つために大学に行くという考えは良くない。大学は学問の探求と自分自身の理性を磨く所だと私は思っている。

就職についてだが、会社は好きな仕事ができる所と考える方がよい。与えられた仕事が好きになるように努力する所である。私は昭和三年に大企業のM化学社が高卒採用を再開したのでそこを受験するように担任のF先生から言われ、希望外の会社であったが入社することになった。配属されたのは「計装」というプロセス制御の部署で複雑な電気の計算が必要な仕事であった。ところが我が家は台湾からの引揚げ家庭で貧しく、機械科の専門教科書以外は買わなかったため電気の計算に自信が無く、会社を辞めようかと随分悩んだが、負け犬的な退職はしたくなかったので、古本屋で「電気用数



増改築した第一学生食堂 ポーノ

「学」、『網状回路計算』の参考書を買ってきて猛勉強した。おかげで機械と電気に関心を持って重宝がられ、入社から五年後、部長代理に昇格したのを機に担当組織内に「電子回路で機械を制御する『メカトロ』」の部署を新設して好きな仕事を手に入れた」

N君の眼の輝きを見てもう一言付け加えた。「ドイツの詩人ゲーテは『成功の秘訣は、好きなことをやるのではなく、やっていることを好きになることだ』と言った。僕はこの言葉を大切にしているんだよ」N君は私の話に深くうなずいた。

* * *

実習は緊張の連続だったが、純真な後輩達の活動に触れることができた楽しい二週間であった。

【この思い出を辿りながら、〈会社とは何か〉(どのように仕事に取り組むべきか)についての若者たちへの提言を『上品に働いて利益を得る』と題して執筆し、原稿段階で恩師の小谷典子先生にも目を通していただいで自費出版した】

(人文第二回卒・社会情報論コース)

研究室同窓会・同期会たより

人文学部仏文研究室同窓会 (第一〜四期生)

白石 重昭

年の瀬も迫った平成二五年二月二八日、山口湯田温泉の「翠山荘」で、恩師の末松壽先生をお招きし、人文学部仏文研究室の第一〜四期生で初めての同窓会を開催しました。卒業以来、約三〇年ぶりの再会です。

平成二四年五月に恩師の井上三朗先生が逝去されたことがきっかけで、これまで一度も開催していなかった同窓会を開催することとなったのです。第一〜四期生三四人中、一期生からは沖田さん、浅野さん、四期生からは、小原さん、栗原さん、白石さん、中西(旧姓古谷)さん、そして二期生の私を入れて七名が参加しました。

当初、仏文研究室に集まる予定でしたが、人文学部の建物が耐震工事で立ち入りできないため、残念ながら集合場所は翠山荘となりました。ロビーに集まったときは、三〇年ぶりですから、ずいぶん印象が変わった人、あまり変わらない人とありましたが、声や話し方は昔のままなので、すぐに懐かしい大学時代の思い出話で盛り上がりました。

特に故・井上先生については、ジュリアン・グリーン等の『他者』など先生の研究やフランス語の授業を思い出し、出席者一同で先生を偲びました。「僕の授業おもしろいですか?」と関西弁で出席率の悪い学生に問いかけられていたのが、あの頃印象的でした。またお酒はあまり強くなかったのにコンパにはいつも付き合っていたいただいた思い出もあります。話しているうちに、いつも一生懸命に研究や授業に取り組んでおられた井上先生のごことが目に浮かびました。

しばらく歓談した後、会食となりましたが、残念ながら中西さんは用件があったため参加で

きず、末松先生を囲んで七名で山口の地酒を楽しみながら語り合いました。末松先生は七四歳になられました。でもお元気で最近になって再婚もされたとのこと。一同、祝杯を挙げるとともに、先生との思い出話に花が咲きました。当時の写真を回覧すると一挙に三〇年前に戻ったような気分になり、懐かしい記憶がよみがえります。話題は、それぞれの近況、学生時代の思い出から、だんだんと教育論、文学論、ビジネス論、マスコミ問題、国際情勢等々多岐にわたり、それぞれの歩んできた人生がわかるような議論でも盛り上がりました。

一次会ではとても語り尽くせないで、二次会は参加できる人で、我々の在学時代から一ノ坂川にあったバー「白馬館」に場所を移して、夜が更けるまで語り合いました。

一同、再会を約束して別れましたが、次回はもっと人数を集めて開催したいと思います。次の同窓会が今から楽しみです。

(人文第三回卒・仏語学・仏文学)



社会学同窓会

宮藤 隆夫

毎年六月の第一土曜日を定例日として開催している社会学同窓会の本年度第三七回総会は、六月七日午後四時からこれもまた例年の会場となっている「防長苑」で開催されました。

総会では、会長あいさつの後、ご出席の先生方を代表し、小川全夫先生のごあいさつをいただきました。その後、当該年度の収支決算等について審議し、これらを出席者全員で承認しました。

また、研究室の近況報告では、人文棟の耐震改修工事が終了し、以前とは大きく様変わりした新しい施設の様子が紹介されました。

総会には、小川先生、小谷典子先生、速水聖子先生、岡邊健先生の先生方四人と昭和二九年、昭和三二年、昭和三六年、平成七年、平成一三年および平成一四年卒が各一人、昭和四二年及び昭和四五年卒が各二人、平成六年卒が三人(女性)の計一三人の会員の出席がありました。このうち女性は六人で県外からの出席者は二人(長崎、福岡)でした。

今回は、横田尚俊先生、高橋征仁先生はご都合が悪く、また、広島から毎年ご出席の宮川秋三(昭和二九年卒)先輩は体調が優れず残念ながらご欠席でした。

総会終了後、全員で記念写真を撮り、会場を移して交流会が開催されました。

交流会は、小谷先生のごあいさつと乾杯のご発声により開宴し、先生方のお話や久し振りに出席された会員をはじめ出席者一人ひとりの近況報告、更には熱い思いなどに耳を傾け、木村浩会員(昭和三二年卒)の一本締めで二時間余の歓談は和気あいあいのうちに閉幕となりました。

また、本年度は学部同窓会の鴻文会から同窓会開催に対して助成を受けました。

今、同窓会の存在そのものが誠に危うくなっております。特に若い会員にとって同窓会と



は、どのような存在なのでしょう。全くといっていいほど関心のない会員に同窓会へ目を向けてもらうにはどのようにしたらよいか、答えが見つかりません。

同窓会には毎年、恩師、先輩をはじめ幅広い年代の会員が出席されます。同窓会の場で縁に出会って縁に気付き、縁に気付いて縁を活かし、袖振り合う縁も縁として同窓会の絆を深めていただくことが世話する者の願いであります。

どうぞ、気軽に同窓会へお越しください。思い出に残る出会いがきつと待っております。

最後に、小谷先生には、山口県の初代の男女共同参画審議会会長として、「山口県男女共同参画条例」の制定など、男女共同参画社会づくりに貢献されたご功績により、本年度の男女共同参画社会づくり功労者総理大臣表彰を受けられました。同窓会として誠に喜ばしいことでもあります。心よりお祝い申し上げますとともに今後益々のご活躍、ご健勝を祈念申し上げます。

(文理第一五回卒・社会学)

文学部文学科第一五回(昭和四二年社会学)卒業の宮藤隆夫さん(元山口県企業局長)が、永年にわたる地方自治功勞の功績により、
平成二六年度秋の瑞宝双光章を受章されました。
宮藤さんは、鴻文会の前副会長で、長年、役員を務めてくださいました。心からお祝い申し上げます。

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができ、営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し事務局で保管する。



二六年度東洋史学懇談会を行う

菊谷 進

人の絆はいろいろな形で結ばれる。
去る六月下旬、現在宮崎市に住んでおられる栗原宏氏(第一二回東洋史学卒業)から小畑龍雄先生(元文学部東洋史学研究室)に関する追悼文集を送ってきた。
栗原氏は当時出張先の書店で偶然この年報を発見し、先生の高潔な人柄をその後の自分の拠り所とされたと述べておられます。毎年、山口市で開かれる東洋史学懇談会で伝えてほしいと言われました。届いた冊子は追手門学院大学文学部東洋文化学科発行の「東洋文化学科年報第二号小畑龍雄教授追悼号」(一九八七年一月)でした。



小畑龍雄先生

この中で小畑先生の生い立ち、三高、京都大学と進まれ大学助手生活を経て昭和二四年山口大学へ赴任されたこと。そして長い教職生活の間に数多くの研究発表が行われました。

先生は定年以前に山口大学を辞して京都市立命館大学文学部へ転じられた。

その後追手門学院大学で教鞭をとられたのです。同校の授業では小畑先生の共著「東洋史通論」(創元社)をテキストにされており大学生用テキストとしては出色の本であったと言われています。そのような生活の中で一九八五年秋の教職員集団検診の結果、即入院となり、以後大学には来られることはなかったと言われている。

ます。小畑龍雄先生は享年七十一歳、追手門学院大学着任(昭和五六年四月)から六年後のご逝去でした。

栗原氏から受け取った冊子を東洋史学卒業生の同期、先輩、後輩の各氏に読んでいただきました。各人の読後感は様々でした。山口大学で小畑先生と過ごした親しみのある生活を懐かしく思ったといった感想が多かった。栗原氏の努力により卒業生がお互いの健康を確かめ合い、近況も知ることが出来、大変有意義であったと考えます。



懇談会について

一〇月三十一日、例年行っている「山口大学東洋史学懇談会」を山口市神田KKRあさくらで行った。都合により一人欠席五人の会合となりました。各人が一年間の出来事、自分の意見など語り合いました。東洋史学卒業生ですから特に隣国中国に対する意見が多く政治についても批判がありました。柳場善治氏が小畑龍雄先生の肖像写真を全員に配るなど色々気くばりもありました。話は二時間位続きました。会の終わりに来年度から当番制でテーマを決め、会合の一部の時間で小さな研究発表をしてみたらという意見が出ました。この点について皆賛成し、たのしい会を終えました。

(文理第六回卒・東洋史学)

第二回 山口大学 ホームカミングデー開催

連なる周防の山高く
いま暁の雲を呼ぶ
希望は高くはつらつと
若き吾らのかいな組む
世代の覇者の歌声は
世紀の空に高らかに
ああ山大 山大 山大！

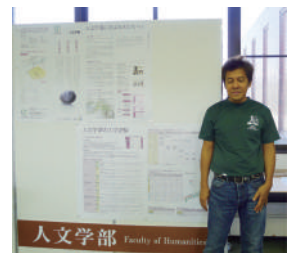


山口大学メン
ネルコールOB
会、かくしゃく
とされた大先輩
方の力強い歌声
が、大学会館
じゅうに響きわ
たりました。
平成二六年
一〇月四日 第
二回ホームカミ
ングデーは、岡
学長の挨拶と古
賀理事・副学長
(総務企画担
当)による大学
概要説明の後、大先輩の学生歌による幕開けと
なりました。

卒業生を母校に招き、教員、在学生と語らい
の場を作ることを目的とし、継続して行うこと
で、卒業生、卒業生同士のつながりの輪を広げ
ていこうとするもので、二回目となる今年の
ホームカミングデーは、「地域と共に活きる山
口大学」をテーマとして様々な催しが行われま
した。

大学会館では、マジックショーやゆるキャラ
紹介、チアリーダーによる演技、合気道同
好会による演武などが披露され、また、会館の
二階会場では各学部の紹介パネルの展示のほか
ロビーには昔懐かしい大学の様子を伝える写真

が展示されていました。



増築工事を終えたばかりの第一学生食堂ホー
ノでは、マグロの解体ショーの後、マグロ丼の
販売があり、学生たちが長蛇の列をなしていま
した。
共通教育棟では、おもしろプロジェクトの歴史、現在進行中のプロジェクトの紹介も行われ
ていました。



体育館ではスリッパ卓球大会が行われ、熱戦
が繰り広げられました。学長、田中理事・副学
長(人事労務担当)によるエキシビジョンマッ
チでは、岡学長の俊敏なフットワークとスマッ

シュに参加者全員から声援が飛んでいました。
午後からは共通教育棟第一講義室において、
山口大学創基二〇〇周年記念第四回基幹シンポ
ジウムが行われました。福田百合子氏(中原中
也記念館名誉館長、山口県立大学名誉教授)に
よる「学祖・上田鳳陽と外郎」と題した講演に
引き続き、村岡嗣政山口県知事、福田氏をパネ
リストに迎えて岡正朗山口大学学長とのパネル
ディスカッションが行われ、山口大学の地域と
の関わり、大学の役割、今後への期待などにつ
いて意見交換が行われました。

平行して、人文学部小講義室では、人文学部
交流会が開催され、昨年同様、多くの先生方、
学生、同窓生が集まり、和やかな懇談の場とな
りました。
田中晋先生が、退職された今も、いえ、今の
ほうが楽しく研究をしているとのお話が印象的
でした。



このほかにも、山口七夕会による講演会や留
学生と茶道部による母国の食べ物や音楽を紹介
する「異国を巡る食の旅」、学生によるキャン
パスガイドなど、多くの催しが行われました。
そして、学生食堂きららの懇親会は、山口大
学混声合唱団による学生歌で締めくくられま
した。



今年のホーム
カミングデー
は、千人以上の
来場者があった
そうです。来年
はまた新たな催
しが企画される
ことと思いま
す。是非、この
ホームカミング
デーに足をお運びください。山口大学の新しい
取り組みをご覧になり、ゆつたりとしたキャン
パスで、懐かしい顔に会い、楽しい一日が過
せることをお約束します。



人文学部では、「山大人文学部卒業生メール
ニュース」を配信しています。配信内容は、山
口大学や人文学部の行事等に関するお知らせ、
教員の異動のお知らせ、鴻文会からのお知らせ
です。

配信をご希望の方は、
http://www.hml.yamaguchi-u.ac.jp/?page_id=376
にアクセスし、ご登録ください。
(文責 渡邊早苗)

《住所変更についての 連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail:kobun1981@ybb.ne.jp

鴻文会「賛助会員」の 制度に皆様のご協力を お願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」（一人一万円）をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では留学生への奨学金支給事業や「同窓会等」の開催に対する助成などを開始し、活動も多様化しております。それらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中において、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額の厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございました。

活動を支えて下さった方々のお名前を記し、お礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員制度について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしくお願ひします。

平成二五年度賛助会員（順不同 敬称略）

藤本由紀、多田幸子、本園明信、山崎幸子、大塚一徳、平尾美恵子、松尾善弘、小池美佐子、中野文男、藤井日正、白石重昭、石川哲也、武藤辰喜、石丸一政、小田稜亮、松浦学、野村悦子、宇称田富男、伊豫英城、倉重雅子、青木寛、磯部薫、林紀元、木村比沙子、沖中武志、細山田康弘、進定己、水井聡子、西村晴二、山本孝夫、小野徹、神崎茂樹、八田順子、岩尾功一、住吉隆義、岡村君子、鳥越郎、浅見洋二、岡野幸夫、大森寛祥、小川朝子、國弘豊嗣、平田昌司、安富大志郎、岡村賢司、田中力人、一居明子、外山紀久子、秋村寛之、岩野訓子、奥田和子、山中静香、小篠美智子、長谷英司、尼川創二、利重迪子、大谷泰子、酒井由紀、吉村崇、高橋幸輔、内田悟、高橋亜希子、田中加代子、中垣八朗、小西啓子、宮原省吾、濱村祐子、三木允彦、浅野真衣、渡邊早苗、中村あけみ、菊谷進、安田正治、池佳代、藤澤真弓、辰巳郁子、谷本和雄、久米慶典、戸谷美代子、須々木由美子、鈴木量子、賀来孝代、桐原真理、椎野由紀子、廣林貴子、近藤千鶴子、青木隆子、江川大器、岩根達夫、橋本美和、大港章子、岡光一浩、加藤久典

編 集 後 記

今号の作成も、いつもの編集諸氏にご尽力願った。深謝。私事だが、大病で身体的にも精神的にも転換点。だが、未だ安普請中。最近、やっと映画「ハンナ・アーレント」を観た。

「考えなければ、誰もがアイヒマンになる」というメッセージは、今の私たちにとって強烈。

(岡光一浩)

今回「同窓賛歌」で健筆を揮われた磯部薫様は高校時代の恩師で、懐かしく拝読しました。また、周知のことかとは思いますが、田中晋様（文理第一四回卒・英米文学）は、著書「詩人スペンサーのころ」を平成二五年一月に出版されましたので紹介します。（内田光邦）

一月二日～四日、自宅で「百茶碗展」と称して新作展示会を行いました。そのため、「鴻文」の編集にはあまり力になれなくて申し訳なく思っています。新作展示会はおかげさまで大盛会、ありがたいことでした。（兼清仁志）

この時期のお茶室には、「無事」の軸が掛かります。しかし、禅語の「無事」は平穩無事の無事ではなく、何ものにもとらわれない、計らいの無い、あるがままの状態のことだそう。今年大流行の「F・F・F」と結びつき、文化の交差を面白がっています。「無事」まで道のり遠しですが。（渡邊早苗）

今回は会報作りの現場に居させてもらう程度でした。諸先輩方のお力でどんな形になっていく会報！を目の前にして、ただただ感激し、頭が下がる思いでございました。主婦生活に浸っている私も、微力ながら貢献できるようになればと思います。（和崎陸子）

湯川先生の指導で卒論を書いた。その先生が亡くなられた。まだそのままになっている研究室を見るのは悲しい。ふるさととはあっても、実家がなくなったような……。先生、お世話になりました。（大谷泰子）

月曜日から金曜日の午後一時から五時まで事務の小野さんが勤務されております。付近にお越しになることがありましたら、是非お立ち寄り下さい。なお、来年度より小野さんの勤務日が変更になる予定です。

会員の皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。（一同）

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。

要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず（ ）内で表記すること。
 ただし①～④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁（二段）組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」一頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却しませんが。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。